

ライフキャリア教育推進に関する研究

—公立小学校におけるアクションリサーチと授業実践を通して—

岡田高德*・織田泰幸**

Research on Promotion for Life Career Education

—Through action research and class practice at public elementary schools—

Takanori Okada* and Yasuyuki Oda**

要 旨

本稿では、人生 100 年時代と言われるこれからの時代に有意義なキャリア教育とは何か、という問題意識に基づいて、そのプロセスの一端の解明を試みるものである。研究の方法としては、キャリア教育を中心とする学校づくりに焦点を当て、所属校の教員を対象にしたアクションリサーチと児童を対象とした授業実践を通して、教員と児童のキャリア意識を調査し、キャリア意識の変容を分析し、考察した。その上で、ライフキャリア教育推進をめぐる今後の目指す方向性について提案した。

キーワード: キャリア教育 ライフキャリア プロティアン・キャリア 計画的偶発性理論 小学校 キャリア発達

I 問題意識と目的

教育現場にキャリア教育が導入されて 20 年が経過した。筆者は、中学校教員時代にキャリア教育や進路指導を行う中で、生徒たちが人生をどのように考えて将来設計をし、どのように生きていきたいのかを考えさせてきた。しかし現場では、キャリア教育を文部科学省 (2018) が提唱する社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けるための教育 (ライフキャリア) ではなく、職業教育 (ワークキャリア) として捉える教員が少なくないと思われる。また、「人生 100 年時代」と言われるこれからの時代は、不確実で曖昧であり、将来設計をすることが極めて困難である。「人生 100 年時代」を生きる中で、職業生活は従来の 3 ステージからマルチステージへ変化していくことが予想されており、子どものキャリア形成にも大きく影響するものと考えられる (L.Gratton 2016)。では、これからの時代に有意義なキャリア教育とはどのようなものであり、どのように実践すればいいのだろうか。

以上のような問題意識をもとに、本研究では、キャリア教育を中心とする学校づくりに焦点を当て、所属校の教員を対象にしたアクションリサーチと児童を対象とした授業実践を通して、教員と児童のキャリア意識について調査・分析する。その上で、人生 100 年時代を生きる子どもたちに有意義なキャリア教育とその課題は何かを明らかにする。

II 人生 100 年時代を生き抜くためのキャリア理論

1 人生 100 年時代において目標達成型キャリアは有効か？

表 1 キャリア形成の特徴 (筆者作成)

キャリア特性	合理性 (plan)	合理性・非合理性 (planned happenstance)	非合理性 (drift)
計画性	計画的	非計画的	無計画的
キーワード	理想・希望・目標	現実・機会・出会い	現実逃避・他責
型	夢追い型 (目標達成型)	展開型	漂流型
理論	文部科学省	計画的偶発性理論 プロティアンキャリア	なし

* 三重県桑名市立光陵中学校 主幹教諭

** 三重大学大学院教育学研究科

村山 (2018) によると、キャリア形成は「登山型」と「トレッキング型」の2つのタイプに分けることができる。前者は「目標達成型」、後者は「展開型」として整理することができる。また、もう一つのタイプとして、「漂流型」を付け加えて整理したものが表1である。

「目標達成型」とは、唯一絶対の目標を立てて、脇目も振らずその達成を目指すタイプである。「計画的に、意図的につくりにくいキャリア」であり、現行のキャリア教育において重要視されており、個人の夢や目標に基づき、人生を逆算して考え、今やるべきことをするキャリア形成である(村山 2018)。これは児美川の「夢追い型」に相当している。しかし、不確実で曖昧な人生100年時代において、キャリアを形成していくうえで、「目標達成型」は「子どもたちの将来に対する視野を狭めてしまう」という課題を抱えるため、これからの時代に適したモデルとは言い難い。そこで筆者は「展開型」こそが、これからの時代に適したキャリア形成だと仮定する。

以下では、「展開型」の基礎となる重要な理論枠組みについて検討してみよう。

(1) プロティアン・キャリア (D. Hall 1976)

プロティアン・キャリアとは、社会の変化に応じて柔軟に変わることのできる変幻自在なキャリアである (Hall 1976)。キャリアは、所属する組織の中で形成されるだけでなく、時代とともに個人の必要に見合うように変更するものである。

プロティアン・キャリア形成の軸となるアイデンティティ (自己理解) とアダプタビリティ (課題適応力) は、子どもに身につけさせたい資質・能力である (田中 2021)。

(2) 計画的偶発性理論 (J. D. Krumboltz 1999)

計画的偶発性理論では、職業生活 (や人生) は夢や目標に基づく必然性ではなく、「偶然」の出来事や出会いによって決まっていくことのほうが多いと考える (Krumboltz 2005)。この理論では、将来は簡単に予測できないことが普通であるため、目標や計画に縛られ過ぎず、偶然を積極的に創り出して自己の潜在的 가능성을大きく開くことを大切にする。そのための行動特性として、①好奇心、②持続性、③楽観性、④柔軟性、そして⑤冒険心をもってキャリアを切り拓くしなやかさが重要になる。

2 本研究におけるキャリア教育の捉え

本研究では、中教審答申 (2011) や田中 (2019) を参考に、キャリア教育を以下のように定義する。

生涯にわたって「幸せの在り方」を探求するために必要な能力を育てることを通して、自分らしい生き方を促す教育。

Ⅲ 児童と教員のキャリア意識に関する調査

1 調査の概要

本研究の対象は、①有志教員、②管理職、③6年生児童である。研究の方法は、参与観察、半構造化インタビュー、リフレクションシート (OPPA) の活用である。

現任校では、教員のキャリア教育の認識に対する実態を把握した。その上で、教員を対象とした月1回のキャリア学習会の開催や授業実践に向けた協働的な授業づくりに取り組み、筆者が教員に働きかけること (アクションリサーチ) や6年生の授業実践を行うことで、教員と児童のキャリア意識がともに高まるという、両者の相乗効果の観点を意識したデータ収集および質的な分析を行った (表2)。

誰・どこから (対象)	何を	どれだけ	調査方法 (どうやって)
①有志教員	・キャリア教育に対する意識の変化 ・教育活動におけるキャリア教育の捉え	・学習会後のリフレクション ・事後のインタビュー	参与観察 半構造化インタビュー
②管理職 (校長)	・リーダーとしてのキャリア教育推進の取り組み	・校長会への参加時 ・事後のインタビュー	参与観察 半構造化インタビュー
③6年生児童	・キャリア意識の変化	・全6時間の授業	授業実践 ポートフォリオ 児童の作品 半構造化インタビュー

表2 調査方法

2 調査結果

(1) 教員を対象としたアクションリサーチ

◎今日の学習会のふりかえりをご記入ください。

昨年度5年生を担任していたときに、「将来の夢や将来どんな人になりたい?」ときいていました。学級の半分以上がこの問いの将来の夢に回答していました。ただ無責任に「この職業いいんじゃない?」ということも言えず、聞きっぱなしで終ってしまいました。私が小学生のとき、様々な選択肢を担任の先生に教えてもらっていたら、職業も知らなかった私に「勝手に済んだかもしらねえし、教師の仕事についていけよ」と思っています。だから、今得意なことや興味、関心があることから、「こういう道もあるよ」「こういう職業があるよ」ということを伝えていってあげたいと思います。

◎質問などがあれば書いてください。

図1 教員のリフレクション①

図2の教員は、夢や目標がない児童に対するアプローチの仕方がわからず困り感を持っていたが、「展開型」の話を聞いて、アプローチの仕方に気づいた。知らぬうちに、子どもへ夢や目標を持たせるという価値観が自身の中にあっただことに気づき、「展開型」の価値観が生まれたことで、キャリア意識の深まりがあった。学習後の実践へとつなげようとする意欲も見られる。

計6回のキャリア学習会の中で、ポイントとなったのは「キャリア理論について」をテーマとした第4回であった(実施日:2022年7月26日,参加者:14名(任意))。第4回の学習会では、対象となる児童2名を挙げ、教育相談のロールプレイを通してキャリア理論を紹介した。まずは、学習会後の教員のリフレクションから特徴的な記述を紹介する。

【教員のリフレクションから得られた気づき】

図1の教員は、子どもに選択肢の幅を広げさせることの重要さに気づいている。今までは「目標達成型」の意識が強かったが、本学習会で「展開型」について知ることによって、過去の自分の指導を振り返り、子どもの選択肢を広げること気づいているのである。

キャリアパスホトの各学期のふり返りで「夢、目標がない」と答える児童がいる。どうアプローチしたかわからなかった。これ「何かない?」「小さなことでもいいよ」と聞いてみる。おかげでアプローチしていたと気づきました。トピック型キャリアの話も、この児童にはしてよかったと思います。キャリア形成の目指すべき姿がわかったような気がして、2学期に喜ばせて終わらせてあげよう。この時間もかけてキャリアの授業も行いたい。意欲が高まりました。ありがとうございました。また教えて下さい!

◎質問などがあれば書いてください。

図2 教員のリフレクション②

◎今日の学習会のふりかえりをご記入ください。

自分はBの先生役をしたが、そういうのは自分の周りでも多いし、それとみんな幸せそうに生きているので、むしろ「夢をもっと」なんて言わない方がいいと思えた。ゲーム、おかし、いま何が好きで、何に自分はワクワクするの? そのワクワクはどくした? 増やすのが、「職業=夢」でその選択をさせるよ! ワクワクの増やし方を2学期の小学生には大切なのかなと思えた。

図3 教員のリフレクション③

図3の教員は夢や目標がない児童への教育相談のロールプレイを通して、夢や目標を持っていない子どもが多い実態に気づく。その中で、「夢を持って」という教師の発言自体が子どもを苦しめることや、小学生の実態として、今ワクワクすることを増やすことの方が重要でないかなど、「展開型」の考え方に転換している。

いずれの教員も自身に埋め込まれていた「目標達成型」から「展開型」の価値観への広がりや転換が見られた。

【教員のインタビューから得られた気づき】

続いて、キャリア学習会に参加してからの意識の変化を明らかにするためのインタビューを実施した(実施日:2022年7~8月,対象:学習会全参加の教員9名)。質問は、①学習会参加後のキャリア意識の変化、②自身のキャリア形成と教育観が教育実践に及ぼす影響、③キャリア教育についての意見であ

る。このインタビューにおいて、顕著に意識の変化がみられた教員の結果を紹介する。

A 教諭 (40 代)

高学年の担任。A 教諭は自身が教師になるという夢を叶え、夢を持つことの大切さを子どもたちに伝えてきた。しかし、学習会で「展開型」のキャリア形成について知って、実の子どもへの対応に変化があったという。

夢ってということに関しては、軽い言い方をしていたと思いました。自分の子どもに「あんた何になりたいの？」って聞いても、わからないって言う。なんかそれをあかんでいうふうに思っていたし、目標を持ってやった方がいいみたいなことを言った自分もおったし、持っていないことにすごい焦りを感じたりとか。けど、今思うのは、そういうことじゃない、別に夢を持ってなくてもいいんかなって。今やるべきことをしっかりやって、いろいろ吸収すればいいって。(中略)何か押し付けとったんかな、自分の考えというか、夢を持つことが〇みたいな。行動するとか、まずやってみるとか。

このように A 教諭は、学習会に参加することで自身のキャリア意識を深め、自分自身のキャリアを振り返り、これからの生き方を考える機会となった。また、学級の子もたちへの投げかけや家庭での子どもへの関わり方に変化があった。

C 教諭 (20 代)

新採 3 年目、高学年担任。自身のキャリアは人との出会いが大きな機転となっていたと振り返っていた。夢を持つことに関して、次のように答えていた。

夢ってというのはコロコロ変わってくるものであって、僕が夢を追い求めてきてなかった人なんで。流れで教師になったんで、あんまり夢を持つことは大事に思っていないんですけど。でも、目標を高く設定することはすごい大事だと思っています。挫折や壁にぶち当たるときがあって、自分の学力であったり、家庭環境であったり。(中略)今自分がそこにおいて自分の歩いていく道ってというのは絶対固定されていないですよ。あちこちに分岐されていくもので。あのときこうしたら、そのゴールに向かって修正するのではなくて、分岐した先でいろいろなことが待ち構えていた方が絶対楽しいんじゃないかなと思うので。教師なので子どもたちが夢を持つことが大事とか一応言うんですけど。正直なことを話すなら、「今を楽しめ」って言いますね。

この発言 (特に下線部) から、C 教諭は「計画的偶発性理論」と関連する考え方を持っていた。学習会で自分の考えに理論が関連することに気づき、その後の教育活動に活かそうとする姿が見られた。

(2) 6 年生児童を対象とした授業実践

授業実践では、「自己理解・自己管理能力」「キャリアプランニング能力」に焦点をあてて、「わたしデザインマップ」の作成を通して、アイデンティティの形成を図った (実施日: 2022 年 9~10 月, 対象: 6 年生児童 132 名)。授業デザインは以下のとおりである (表 3)

時	1	2	3	4	5	6	7
日にち	9/14 (水)	9/16 (金)	9/28 (水)	10/5 (水)	10/12 (水)	10/21 (金)	10/26 (水)
本質	キャリアを「働き方」と「生き方」の両面から捉え、「自分らしい生き方」と向き合い、主体的にキャリアを形成すること。						
目標	「働く」ことに興味・関心を持つ。	「わたしデザインマップ」を作成し、自分の強みを知る。	「わたしデザインマップ」を作成し、自分の強みを活かすことを考える。	「わたしデザインマップ」を交流し、友達から見た「自分」を知る。	学級交流で友達の人生に触れる。	みらい人から話しを聞き、生き方の視野を広げる。	活動を振り返る。
学習活動	・働くことについてイメージを掴む。 ・グループで交流し、働くことについて考える。	・「わたしデザインマップ」の下段を作成する。	・「わたしデザインマップ」の上段を作成する。	・完成した「わたしデザインマップ」をグループで交流する。 ・友達の強みや好きなことを伝える。	・学級で「わたしデザインマップ」を発表し、「自分らしさ」を友だちに伝え、理解し合う。	・河合純一氏の講演を聞き、生き方に触れる。 ・「わたしデザインマップ」の見直しをする。	・活動全体を振り返る。 ・現時点での今後の人生をデザインする。 【ワークシート】

表 3 授業デザイン

【結果と気づき】

第1回 9/14	今日の学習のテーマ 自分の将来について考えよう！
-------------	-----------------------------

◎今日の学習で学んだこと、気づいたこと、考えたことなどを書こう！

自分の将来のことであり興味をも、こいなか、たけど、この授業をして自分の将来について考えてみようと思いました。将来の夢をもつことは大切だけれども、将来の夢をもつだけでなく何かの出会いを、かけて将来をみつけようと思いました。そして6年生でも「自分の将来」について考え

◎質問やわからないことを書こう。 **てみまろ!**

図4 児童のリフレクション

筆者による講義【第1時】は、児童のキャリア意識を深めることをねらいとした。「目標達成型」と「展開型」の話をして、「夢を持つことが大切」と考える児童が9割を占める中、上記のような児童の感想があった(図4)。他にも「夢を持つことが大切だと思っていたが、人それぞれあっていい」「夢を持つことに対して否定している人の意見も納得できた」という感想があった。固定観念を抱いていた児童が、講義や他者の意見に触れて視野が広がることで、他者の意見を聞くという気持ちも生まれ、キャリア意識を変化させたようである。

第2時～第5時で取り組んだ「わたしデザインマップ」づくりでは、自分の「好き」を要素分解することで「強み」を見つけ、その「強み」を将来のイメージに沿って組み立て

るものである。その一連の活動は、普段自分の「好き」や「強み」について考えたことのない児童にとって難しい活動になったが、「自分のことを真剣に考えることができた」と振り返る児童が多数いた。これまで自分の将来のことを深く考えていなかったり、考えていても夢がないといった理由から不安を抱いていた児童にとって、将来を不安視しなくてもいいということに気づかせる実践となった。

IV ライフキャリア教育推進に向けての考察

1 理論研究から導かれた視点の検討

これまでの理論的検討と調査研究の成果を踏まえて、ライフキャリア教育推進のための重要な論点について考察を加える。具体的には、次の問いに答える。

人生100年時代において、ライフキャリア教育推進のためには、プロティアン・キャリアと計画的偶発性理論の考え方がどのように活かせるのか？

以下では、この問いについての結論と考察を加える。

①教員や子どもがワークキャリアをライフキャリアとして認識すること。そして、文部科学省が提唱する「夢＝職業」という価値観や「夢や目標ありき」の「目標達成型」のキャリア形成の視野を、プロティアン・キャリアや計画的偶発性理論を基礎とした「展開型」のキャリア形成へ広げること。その2点に大きな意義がある。

本調査では、教員と子どもたちの多くに「夢＝職業」という価値観が見られることが明らかになった。教員は「夢＝職業」と考えてしまうことに違和感を抱き、「目標達成型」に価値を置くキャリア教育の在り方について危惧していた。児童のアンケートではおよそ9割が「夢を持つこと」に価値を置いていることがわかった。

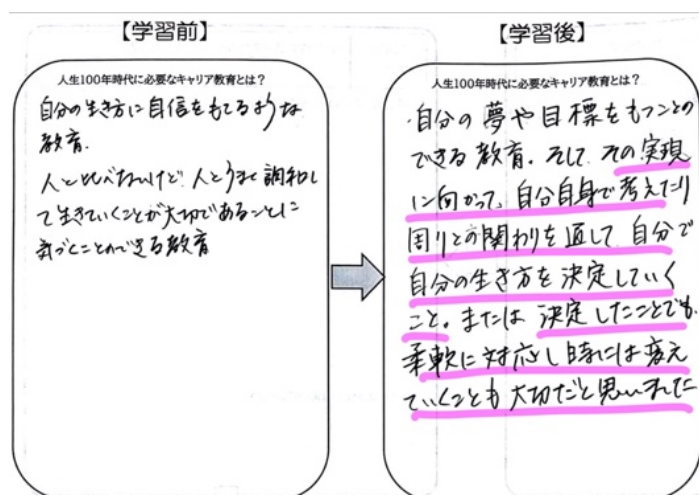


図5 A 教諭のリフレクション

視野を広める契機になるとわかったことが、本研究の最大の成果である。

そのような実態の中、プロティアン・キャリアや計画的偶発性理論は、既存の価値観から脱却し、教員や子どもに新たな視点を与える結果になったと言えよう。図5はA教諭の最後のリフレクションである。特筆すべきは、「決定したことも、柔軟に対応し、時には変えていくこと」の部分である。これはまさに「プロティアン・キャリア」の考え方であり、A教諭自らこのことに気づいたことに大きな意味があった。以上から、文部科学省が提唱するキャリア教育では視野が狭くなりがちであるという課題が浮き彫りになり、両理論が教員や子どもの

②専門性を持った筆者が、所属校で任意研修を開催してアクションリサーチを行うことや6年生児童を対象としたキャリア学習で担任団と協働的な授業実践をすることで、学びの場を提供したことには一定の効果はあった。しかし、学んで終わりになったり、今後の教育活動へ活かしたりすることについては、個人に任されてしまう。また、筆者が働きかけることにより、教員が受け身の状態になってしまう。

本調査では、ライフキャリア教育推進のために、“研修”という形と“協働による授業実践”という2つの形をとった。教員のリフレクションの記述から判断すると、教員研修でライフキャリア教育推進を図ることには、少なからぬ効果があったことを実感している。キャリア学習会を毎回楽しみにしていた教員も少なくなく、新たな視点や学びを得たと絶賛していただいた教員もいた。

その一方で、筆者が感じた課題は以下のとおりであった。

- ☑任意研修としたことで、全ての教員の参加が叶わず、学ぶ意識の高い教員の集まりになってしまった。初回は興味本位で学びに来たが、2回目以降は姿を見せなくなった教員もいた。
- ☑学習会の主体が筆者になってしまった。演習や課題などを交えながら会を運営したにしても、どうしても参加した教員が受け身の状態になってしまっていたことは否めない。
- ☑管理職の先生に参加いただくことはなかった。立場上の問題もあるかもしれない。

このたびの取り組みには、職務の多忙化や「働き方改革」が叫ばれる中であって、多数の教員に参加していただいた。ここで大切なのは、①学んだことを子どもたちに返していくことであり、②教員一人ひとりが高い意識を持ち、教育実践を進めていくことである。教員が主体的にキャリア意識を高め、教育実践を進めていくことが、ライフキャリア教育推進のために欠かせない要件である。

2 ライフキャリア教育推進をめぐる今後の目指す方向性

以上の調査結果を踏まえて、本節では、今後のライフキャリア教育推進のために、具体的にどのような考え方や行為を大切にすればよいかについての提案を示しておきたい。

自己研鑽（個人）にかかわって

①ワークキャリアとライフキャリアの違いを認識し、理論を取り入れる。

担当による講義の形や外部講師の講義でもよい。ワークキャリアとライフキャリアの違いを認識し、ライフキャリアとして捉え直すことが第一歩である。そして、ライフキャリアを裏付ける理論を取り入れることで、よりいっそうの説得力が増す。本調査においても、教員が納得していた部分は理論のどこ

ろが多かった。自分自身の考えが理論と繋がっていると理解度が増す。

②教員自身のキャリアを振り返る場を設定する。

まずは教員がキャリアについて興味関心を持つことが重要である。そのために、自分自身の人生について過去—現在—未来を通して考える機会を設けるとよい。

授業研究・校内研修にかかわって（集団）

③教育活動全体で、基礎的・汎用的能力を養う場面を確認する。そして授業を教員同士で見合ったり、実践を報告し合ったりすることを通して、子どもの学びを見取る。

教育活動の中のどの場面で、どういう基礎的・汎用的能力が身につくのか。また、発達段階によってどのような力が身につくと、将来につながるのか、など、具体的な子どもの姿を想定した上で教育活動を進める。そして、授業を実践したり観察したりすることを通して、子どもの学びの変化を見取ることに慣れることが重要である。

④グループワークを通じた教員研修や授業実践

協働的な学びを通して、キャリア意識が深まる。キャリア学習の中に協働的に学ぶ場面を取り入れることで、効果的に実践できる。

学校組織運営にかかわって

⑤校内研修の一環としてのキャリア学習会【任意】

任意研修とすると、学ぶ意欲のある教員が集まる。より質の高い研修が可能となる。キャリア教育に関する行政資料、キャリア教育設置背景、キャリア理論、教育実践、外部講師による教育講演会など、より踏み込んだライフキャリア教育の推進が図れる。学習者が主体的な学びとなるような研修の工夫が必要である。

⑥校内研修におけるキャリア学習会【全員参加】

学校教育目標がキャリア教育に関係している場合、キャリア教育を柱とした研修が可能となる。教育活動全般で基礎的・汎用的な能力を養うことに重点を置き、教育実践の還流や授業提案など、従来の研修方法で可能となる。教員が一体となってキャリア教育を意識的に推進することが大切である。

⑦中学校区におけるキャリア教育研修会

中学校区で、各小中学校で共通のキャリア教育全体計画を立案し、実践していく。各学校でキャリア教育担当（窓口）を決める。義務教育9カ年でどのような子どもに育てるのか、各校が共通理解を図る。学校の実態によって、目指す子どもの姿を考える。小中で授業や子どもの様子を見合ったりするなど、連携が必要である。

保護者・地域（環境）にかかわって

⑧地域人材や外部講師を招いた教育講演会など、魅力的な大人とかかわる機会を設定する。

本調査では、子どもたちが魅力的な大人とかかわることを通じて、自身のキャリア意識を深め、将来に対する考え方によい変化をもたらすことが明らかになった。教員だけでなく、地域人材や外部講師を招き、キャリア学習を行うことは、子どもたちの人間関係・社会形成能力を身につける絶好の機会となるだろう。

⑥⑦については、現在行われている学校もある。問題なのは、教員のキャリア教育に対する認識が不足していたり、共有されていなかったりする点である。これらを踏まえると、⑤のような任意研修の質を高めて、教員が学びを深め、周囲の教員に伝えていく方法がよいだろう。

その他（⑥⑦以外）は、本調査で実践したことであり、筆者としては一定の効果があると感じている。校内研修の効果を高めるために大事なものは、既存の価値観や前提に囚われ、「学んで終わり」のような

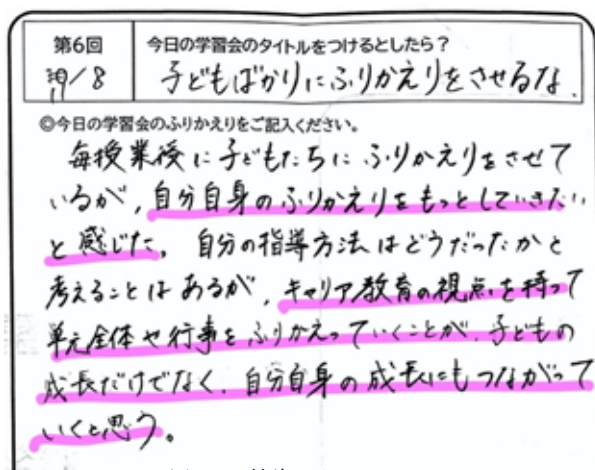


図6 B教諭のリフレクション

受身的な研修ではなく、教員集団によるリフレクションを通じて自分たち自身の認識や前提を批判的に問い直すことで、より良い実践へと改善していく態度や姿勢（ダブルループ学習）である。図6は、B教諭がリフレクションの重要性に気づいたことが読み取れる記述である。教員の主体的な学びを実現できる環境設定をどのようにするかが今後の課題である。

3 キャリア教育モデル

上述の課題を克服するためには、キャリア教育をどのように理解すればいいのだろうか。ここでは、シングルループ学習とダブルループ学習のモデルを手掛かりとして考えてみたい。

図7は、従来のキャリア教育を表したモデルである。従来のキャリア教育には、「夢や目標を持つことは大切である」という前提があり、これを基に現場では教員がカリキュラムを考え、児童に与えている現状と考える。その結果として、児童が夢や職業といった将来なりたいものを持ったか持たなかったかに固執することになる。こうなると、振り返りでは、前提を見直すことなく、手段（与え方）を見直すというシングルループに留まってしまう。これでは、いつまでたってもワークキャリアから脱却することが難しく、児童を苦しめてしまうことになりかねない。また、ここでの児童は、教師から与えられたものに答えていく「subject」としての「主体」となる。

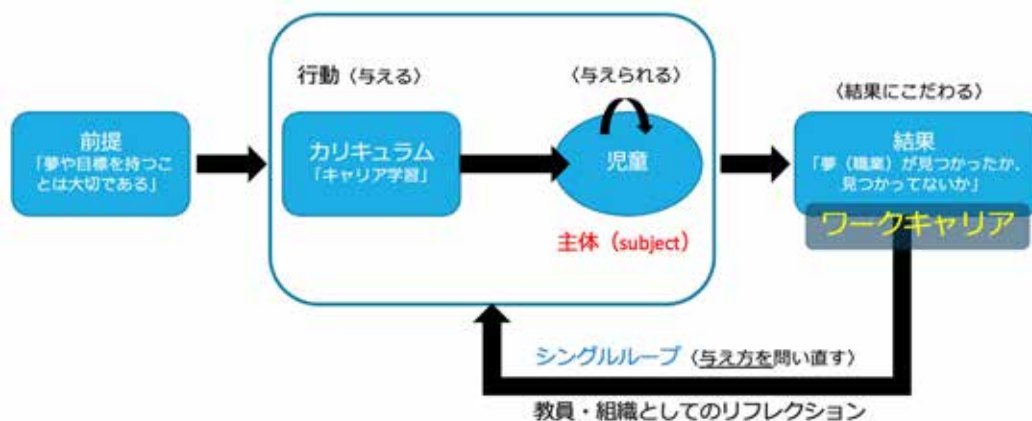


図7 シングルループ学習を基礎としたキャリア教育（西 2017 を参考に筆者作成）

このようなキャリア教育の課題を克服するために、筆者は次のモデルを提案する（名付けて OCM（岡田キャリアモデル：図8））。

このモデルの特徴は、既存の価値を問い直すダブルループ、前提を裏付ける理論、教員の協働的なリフレクションである。教員は自らの実践や学校全体の取り組みを俯瞰的に見つめ直すリフレクションを協働で行う。キャリア教育の中で鍵を握るのは「本物の人・モノ・こと」である。その出会いによって、児童の中に問いが生まれ、自ら探究的な学習をスパイラルで繰り返すような環境設定が重要である。そのときの児童は、自分らしい生き方を考え続ける行為主体（Agent）となる。ここでの教員の役割は、「教えること」というよりは、自分の前提を問い直しながら「子どもたちが探究できる場を設定すること」になる。このような資質・能力を育てることがライフキャリアである。このモデルを意識することが、多くの学校現場においてライフキャリア教育を推進するために重要であると考えられる。

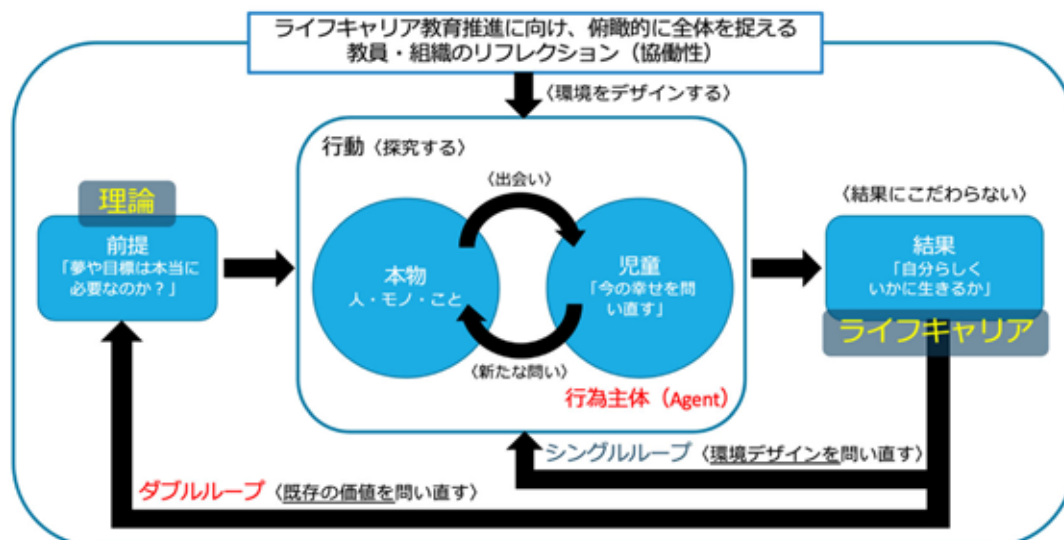


図8 ダブルループ学習を基礎としたキャリア教育 (西 2017,623 頁をもとに筆者作成)

V 今後の課題

本研究では「教員のキャリア意識が高まることで、子どものキャリア意識は高まるのか？」という問いに対して、その明確な関連を解明するには至らなかった。今後はこの関連をとらえる枠組みや指標の開発を行う必要がある。また、キャリア教育の真の成果を明らかにするためには、卒業後の子どもたちを長期に渡って追跡調査する必要があるが、公立学校では限界がある。本研究を「始めの一步」として、今後に活かしていきたい。

VI 主な引用・参考文献

- ・中教審答申『初等中等教育と高等教育との接続の改善について』1999年
- ・中教審答申『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について』2011年
- ・文部科学省『小学校 キャリア教育の手引き (改訂版)』2011年
- ・文部科学省『小学校学習指導要領』2016年
- ・文部科学省『キャリア教育の推進』2018年
- ・文部科学省『小学校 キャリア教育の手引き』2022年
- ・本田由紀『教育の職業的意義』ちくま新書 2009年
- ・本田由紀『社会を結びなおす—教育・仕事・家庭の連携へ』岩波書店 2014年
- ・児美川孝一郎『キャリア教育のウソ』ちくまプリマー新書 2013年
- ・児美川孝一郎『夢があふれる社会に希望はあるのか』ベスト新書 2016年
- ・L.Gratton, A.Scott『LIFE SHIFT』東洋経済新報社 2016年
- ・高部大問『ドリーム・ハラスメント「夢」で若者を追い詰める大人たち』イースト新書 2020年
- ・渡辺三枝子『新版 キャリアの心理学 キャリア支援へのアプローチ』ナカニシヤ出版 2018年
- ・D.T.Hall『プロティアン・キャリア 生涯を通じて生き続けるキャリア—キャリアへの関係性アプローチ』亀田ブックサービス 2015年
- ・J.D. Krumboltz『その幸運は偶然ではないんです!』ダイヤモンド社 2005年
- ・村山昇『働き方の哲学』ディスカバー・トゥエンティワン 2018年
- ・池上彰『なぜ僕らは働くのか 君が幸せになるために考えてほしい大切なこと』学研 2020年
- ・玄田有史『希望のつくりかた』岩波新書 2010年
- ・竹内義晴『「じぶん設計図」で人生を思いのままにデザインする』秀和システム 2014年
- ・田中研之輔『70歳まで第一線で働き続ける最強のキャリア資本術 プロティアン』日経BP 2019年
- ・田中研之輔,内田雅和『プロティアン教育 三田国際学園のキャリアエスノグラフィー』株式会社キャリアナレッジ 2021年

- ・鍛冶真知子『小学校教員のキャリア教育への意識向上とその効果～教員研修と授業実践を通して～』兵庫教育大 2013 年
- ・川村孝樹『汎用的能力の素地をつくるキャリア教育の在り方の考察—自己理解とキャリアプランニングに焦点を当てた「わたしみらい」の実践から—』上越教育大学教育実践研究第 29 集 2019 年 235-240 頁
- ・西巖弘「ダブル・ループ学習の視点に基づくカリキュラム・マネジメントの実践的研究」中国四国教育学会編『教育学研究紀要』第 63 巻 2017 年 621-626 頁